

新刊紹介

1. 対馬宗氏の中世史

荒木和憲著

2. 汽船の時代と航路案内

松浦 章著

荒木和憲著

『対馬宗氏の中世史』

吉川弘文館 二〇一七・二刊  
四六 三〇〇頁 三三〇〇円

本書は、中世において対馬宗氏がいかなる存在であったのかについて、朝鮮への通交の展開、幕府・將軍、北部九州の守護・国衆との関係を踏まえつつ時系列に沿って述べたものである。

第一章「中世対馬の国制上の位置」では、平安末期から戦国期にかけての対馬守護・地頭の変遷を考察し、鎌倉時代には武藤(少弐)氏の守護代・地頭代であった宗氏が、室町初期になると幕府から対馬の知行主とみなされるようになり、一四四〇年代後半に対馬守護に任じられたという見通しを提示する。

第二章「進展する領国形成と朝鮮通交」では、宗貞茂・貞盛・成職・貞国が家督であった時代をとりあげる。「領国形成の本格化―宗貞茂の時代―」では、貞茂の時代を、北部九州における少弐・宗体制の弱体化を受けて、北部九州経略から対馬の領国支配

と朝鮮通交に重点を移した時期とする。

「対馬国」の「公方」へ―宗貞盛の時代―」では、少弐教頼が対馬に逃亡してくる文安四年(一四四七)八月頃から、貞盛の嫡子彦六が「成職」と称する宝徳元年(一四四九)十一月頃の間、宗氏が対馬守護に補任されたことと結論づける。「日朝」両属一下での実利の追求―宗成職の時代―「豊崎郡主系宗氏の飛躍―宗貞国の時代―」では、荒木氏の前著『中世対馬宗氏領国と朝鮮』(二〇〇七年)で扱えなかった成職・貞国時代の政治史を整理し、貞国の時代に家督が將軍の一字を拝領し、かつ世襲官途「刑部少輔」に任官されるという構造が定着したと指摘する。

第三章「暗転する領国経営と朝鮮通交」では、宗材盛・義盛・盛長・將盛が家督にあった時代を扱う。三浦の乱の発生、壬申約条の成立によって朝鮮通交権益が激減し、通交権益の分配によって維持されてきた宗氏権力は宗氏一門、直臣団、在地被官に対する求心力を低下させ、政変と騷擾が相次いだ時期だとする。

第四章「復調する領国経営と朝鮮通交」

では、宗晴康・義調・茂尚・義純・義智の時代をとりあげる。「暫定政権の樹立と家中の成熟―宗晴康の時代―」では、将盛廢位事件と宗姓一斉改姓を通して宗氏当主と一門・直臣団が一定の緊張関係を保ちながら調和する体制が形成されたとする。「国泰家栄」の実現―宗義調の時代―では、朝鮮通交権益の順調な回復を背景に、義調は無難な政権運営を実現することができ、宗氏の権力の安定期が再来したとする。「家督と隠居の相克―宗茂尚・宗義純の時代―」「多難の時代のはじまり―宗義智の時代―」では、隠居した義調が依然として領国の実権を保持していたことを指摘する。

以上が本書の概要であるが、本書は、宗氏被官の家文書に代表される国内史料と『朝鮮王朝実録』に代表される国外史料を駆使し、中世の対馬宗氏について通時的に分析しているところに最大の意義がある。現段階において、対馬宗氏を理解する最善の書である。

(上杉 憲)

松浦 章著

## 『汽船の時代と航路案内』

清文堂出版 二〇一七・二刊  
A5 三七五頁 八九〇〇円

一日のうちに上空を飛ぶ全ての飛行機の様子を世界地図上にシミュレーションした動画を観たことがあるだろうか。数十秒のうちに、世界中の各都市間の航空経路やその頻度といった世界大のヒト・モノの移動ネットワークを視覚的に把握することができ。では、近代の船舶を対象として同様のシミュレーションを動かした場合、太平洋・東アジアの海上にはどのような線がどの程度引かれ、またそれらは時代の経過とともにどのように変化するだろうか。本書は、中国・日本の海上交通についてその実態を明らかにすることを主たる研究課題としてきた著者の「半世紀に及ぶ研究生活の一区切り」であり、また関西大学東西学術研究所アジア文化研究センターにおいて著者が代表者をつとめた「東アジア文化資料のアーカイヴズ構築と活用法の研究拠点形成」プロジェクトの「まとめと申すべき

著作」である(後記)。書名にある「航路案内」とは、各海運会社が顧客向けに発行したいわば営業航路別のパンフレットで、宣伝や沿革、航路図、到着地案内、航海日程、海陸連絡案内等を内容とした。序章が「アーカイヴズとしての航路案内」と題されているように、近代史資料としての「航路案内」の発掘と紹介が本書の主題と言えよう。

本書は二〇一一年以降の日中での既発表論文および学会報告から構成され、全四編、序章と補論を合わせて全十六章からなる。第一編はやや全体的な話で、「汽船の時代」を迎えた一九世紀以降の中国が、欧米や日本とどのように繋がったかを、汽船の頻繁な往来による文化交流の活性化のなかに描く。第二、三、四編は明治期から昭和期の日本海運会社とその「航路案内」の紹介を主としており、日本郵船、大阪商船、社外船四社(原田汽船、阿波国共同汽船、嶋谷汽船、南洋郵船)を取りあげる。「航路案内」だけでなく日中の新聞資料を存分に利用し、日本内地と中国沿岸部、朝鮮、台湾、南洋を接続した海運の運航状況(頻度、日数、使用

船舶、寄港地等)が判明する限り記述されている。ただし、経営史や日中間係史など他の研究成果との対話がほとんど存在しないため、各航路の営業状況が同時代において文化的、経済的あるいは政治的などのような意義を持ったのかという点については本書では具体的には論じられない。既刊書や各章間での内容重複も少なくなく、あくまで「航路案内」の資料紹介という位置づけなのかもしれないが、本書において「航路案内」の史料としてのオリジナリティとポテンシャルが充分に紹介されているとも言えない。運航実態に関心を有する著者は主に「航路案内」記載の日程表や使用船舶概要を検討の対象とするが、それらは(著者も多数引用しているように)新聞や公文書からも判明するからである。評者としては、たとえば昭和十桁代に発行された南洋郵船の日本ジャワ線の「航路案内」(三二六頁)が旅客の目的に二〇日間程度の「島内の視察」を想定していることや「初めての渡航者」を取り込もうとしている点に、イデオロギー空間や産業・企業単位で捉えられてきた日本人の「南進」のリアリティを追求

しうる可能性を感じるし、また「北米航路案内」の長々しい宣伝文句を太平洋航路における日米間競争の文脈に置けば、企業努力の内実が浮かびあがるだろう。台湾航路に一九三四年から漸く回数券が導入された(二九一頁)背景も興味深い。広告である「航路案内」は、運航実態の解明と同時に海運会社のマーケティングとその背景を考察することにより一層の史料的价值を發揮するものであり、また海運研究の外からも必要とされるべき存在なのではないかとの感を評者は抱いた。「航路案内」の可能性は、「汽船時代の往事を追懐すること」(一一五頁)にとどまらないのである。その意味で、本書は交通研究に限らずより広い分野から参照されてよいだろう。

(吉田ますみ)